



# ひびき

Letter of the M.Y. elementary school

## 南山田小学校だより

～ ともだちいっぱい かがやく子 ～

学校通信 NO.304  
令和 3 年度 6 月号  
令和 3 年 5 月 31 日

### 生命を尊重すること

副校長 山谷 浩司

瑞々しい青葉が色濃く枝葉を広げ、生命が躍動する季節となりました。幼少の頃より様々な生きものに興味をもち、観察したり飼育したりしてきた者にとって、最も好奇心が揺さぶられる季節です。

小学 4 年生頃のエピソードです。当時住んでいた自宅近くの神社で一羽のヒヨコを見つけました。その神社では前日まで春の御祭が催されていて、ヒヨコは露店から逃げ出したものか飼い主が逃がしたものと思われました。私は、ヒヨコが野犬や猫に襲われてはいけないと思い、家に持ち帰ることにしました。

自宅に戻ると廃材を使って小屋を作りました。小屋の前面と底面は、物置にあった古い鳥かごの格子を利用し、糞が直接地面に落ちるようにしました。不格好な鳥小屋が出来上がると、次は餌の準備をしました。乾燥したトウモロコシと卵の殻、煮干し、青菜を混ぜて搗り潰し、二つの器に餌と水を分けて与えました。ヒヨコは嬉しそうにピヨピヨと囀りました。私は親しみを込めて、「ピーちゃん」と名付けました。

ピーちゃんはすくすくと成長しました。小屋から外に出すと虫を追いかけてたり、庭の植物を啄んだりやりたい放題でした。体も逞しくなりました。黄色い羽毛はいつの間にか白い羽に変わり、頭には鶏冠が生え、2本の足も見るからにがっしりとしてきました。ピーちゃんはヒヨコから若鳥に成長しました。

しばらくして、問題が発生しました。ピーちゃんが夜明け前から「コケッココー」と鳴くようになり、その鳴き声は日増しに大きくなりました。この事態に真っ先に反応したのは祖母でした。「このままでは、近所から苦情が来る」というのです。自宅の庭は両隣と隣接しており、ピーちゃんの鳴き声が近隣の方々の睡眠を妨げることは容易に想像できました。この難問を解決するために、私は本気で考えました。

「近所の人たちはピーちゃんの姿を見ていない。ピーちゃんの姿を身近に感じてくれればピーちゃんへの親しみの気持ちが沸き、早朝の鳴き声も大目に見てくれるに違いない。そうだ、ピーちゃんを散歩させて、近所の人たちのアイドルにしよう！！」翌日から、ピーちゃんと散歩を開始しました。学校から帰ると、ピーちゃんを小屋から出し、首に紐を付けて歩道に出ました。犬の散歩と異なりニワトリの一步は小さく、歩く方向も定まらないため、1時間以上の時間を要しました。それでも根気強く散歩を続けました。

散歩を始めて1週間ぐらいが経ちました。いつものようにピーちゃんを小屋から出そうとしたところ、ピーちゃんの姿がありません。母に尋ねると「おばあちゃんの田舎に引き取ってもらったよ」というので、急いで祖母のところへ行き、「ピーちゃんをすぐに返して」と泣きながら哀願しました。でも祖母は黙ったままでした。その日の夜、祖母の田舎のおじさんから電話がありました。

「ひろし君、ごちそうさま。ニワトリ、美味しかったよ。ひろし君ががんばって育てたから、ニワトリも天国で喜んでいるよ。」私は怒りのあまり、受話器を床に叩きつけていました。そして、祖母を罵る暴言を吐き、家を飛び出しました。何て、残酷な人たちなんだろうー。暫くの間、祖母への蟠りの気持ちを払拭することはできませんでした。祖母のとった行動を理解できるようになったのは、ずっと後のことでした。

生きものを飼うということは生きものの「命」に責任をもつと同時に、生きもの自身が持つ本能や行動に対して社会的責任を請け負うことでもあります。飼い犬が他人を噛んだり飼い猫が他の敷地で糞をしたりすると、飼い主には社会的責任が生じます。祖母は小学生の私にヒヨコの世話はできても社会的責任を請け負うことは難しいと判断したのでしょうか。また人間は動物から多大な恩恵を受け、栄養を享受されることで生かされていることを私に気づかせたかったのでしょうか。ニワトリの「命」をいただくことで人が生かされ、その感謝の意味を込めて「ごちそうさま」という言葉で締め括られることを・・・。

学校では飼育委員の児童がウサギに愛情をもって世話をしています。生活科や理科の学習では、植物や昆虫を観察したり育てたりする活動を通して生物の体のつくりや変化について理解を深めています。学習の終盤には、動植物を愛護する態度がこれまで以上に定着していることでしょう。生きものと直接関わる体験を通して「命」の営みに触れ、生命への慈しみの気持ちがさらに広がっていくことを期待しています。